

中学校における「考え議論する」道徳授業の在り方

—自己決定力の育成を目指して—

高知大学大学院総合人間自然科学研究科教職実践高度化専攻 指導教官 森 有希
高知県立中村中学校 教諭 畔元 杏奈

【研究の概要】

本研究の目的は、自身の考えを表明・議論し問題解決を図る道徳科の授業実践及び成果の検討を通して、生き方の問題に関する生徒の自己決定力を養うことのできる道徳授業の在り方を明らかにすることである。研究の方法としてはデューイ（John Dewey）の提唱する問題解決型道徳授業の 4 ステップを授業での具体的ステップに捉え直し、道徳科授業に取り入れて実践を行うこととした。授業実践として、4 ステップを道徳授業と特別活動などで組み合わせて行うこととし、ユニットを計画し取り組んだ。その結果、デューイが提唱した問題解決の 4 ステップを導入することで、「葛藤」「内省」「熟慮」が促され、「考え議論する」道徳に迫ることができると考えられた。また、この問題解決の 4 ステップを導入したユニット授業の有効性が「自己決定力」に対しても見いだされた。

【キーワード】 中学校 考え議論する 道徳授業 自己決定 問題解決

1. 問題の所在と目的

（1）問題の所在

道徳授業で養ったはずの道徳性が実践に結びつかないということが、「今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）」（2013）でも指摘されている。実効性ある道徳性を養うためには、道徳的価値を自分との関わりで捉え、多面的・多角的に考える中で、自分のことを振り返って価値判断を繰り返し、生き方の問題に対する自己の行動方針を立案していく必要がある。しかしながら、これまでの道徳授業では、道徳的価値の理解に留まり、自己の行動方針を立案し、行動につなげる自己決定力が十分養われていないと筆者は捉えている。

なお、ここでいう自己決定とは、柳沼（2012）の論を参考に、問題に対する価値判断であり、相互に合意を形成できる自分なりの解決策の決定とする。

（2）目的

本研究では、自身の考えを表明・議論し問題解決を図る道徳科の授業実践及び成果の検討を通して、生き方の問題に関する生徒の自己決定力を養うことのできる道徳授業の在り方を明らかにする。

2. 研究の構想

「考え議論する」道徳授業を実現し、自己決定力を育む道徳授業の在り方を明らかにするには、問題を解決する中で思考と感情と行為を調和的に統合して人格を形成することを提唱するデューイ（John Dewey）の 4 ステップが適しているのではないかという考えから、デューイの問題解決型道徳授業の 4 ステップの理論に着目することとした。

（1）「考え議論する」道徳授業

学習指導要領（2017）が目指す「考え議論する」道徳とは、道徳的価値に根差した問題について自分がどのように捉えたり解決したりするかを「考え」、異なる意見を持つ他者と「議論する」ことで多様な考え方に出会い、よりよく生きるための見通しをもち、道徳性を養う学習であると考えられる。この「考え議論する」道徳を通して養う道徳性は、将来、道徳的な選択や判断が求められる問

様式 4

題に対峙した時に、自分にも他者にとってもよりよい選択や判断ができるような資質・能力であり現実の困難な問題にも対処し得る実効性のある道德性である。そうした力は、道德的価値を自分との関わりで捉え、多面的・多角的に考える中で、自分のことを振り返って価値判断を繰り返し、自己の行動指針を立案していくことで養われると考える。

つまり、「考え議論する」道德の実現に必要な要素は、問題を意識し解決しようとする「思考意欲」、他者との「話し合いや議論」、そして、考え議論する中で「自己内省」し、「行動立案」のうえ、「実践意欲」をもつことであると本研究では考えた。

(2) デューイの提唱する問題解決型道德授業の4ステップ

デューイ（河村訳. 2002）は、「われわれは自然発生的に、反対しあう二つの方向に惹かれる。両立しない好みがある、互いを制しあう。われわれは躊躇し、それから躊躇は熟慮になる。」¹そして熟慮とは行為のさまざまな進路の想像的予行演習であり、価値を比較して判断し、意図的であり価値の意識に基づくものであると述べている。熟慮は人がどういう種類の存在に最もなりたがっているかを発見する過程であり、「熟慮された決定という意味における選択」²こそが自我の最も特徴的な活動であって、人は熟慮的にしか選択をしないと論じている。「選択は、既存の自我を現すと同時に、未来の自我を形成する」³という言葉からも、デューイの考える熟慮のある選択とは未来のなりたい自分を選ぶことであり成長の指針なのだといえることができる。

こうしたデューイの言葉から、「考え議論する」道德によって養う道德性、つまり、将来、道德的な選択や判断が求められる問題に対峙した時に、自分にも他者にとってもよりよい選択や判断ができるような資質・能力を養うためには、躊躇の中で「葛藤」し、自身の意思のあり様を「内省」し、「熟慮」のうえで未来のなりたい自分を選ぶ「自己決定」をしていくことだと捉えられる。

デューイは、また、行動方針を自己決定して問題解決を図る中で、思考と感情と行為を調和的に統合して人格を形成するとも述べている⁴。授業の場面で言えば、生徒は問題解決型のステップの中で問題に対し自分がどう感じるのか（感情）、なぜそうするのか（思考）、どうすればいいのか（行為）を葛藤とともに内省し、他者の意見を聞いたり、自分の意見を確認したりする中で、何をすべきか、何がよいのか熟慮し解決策を練り上げ、自己決定していくものであり、それによって人格を形成していくと言える。

では、このデューイによる問題解決の4ステップ（表1）を道德科の学習を念頭に具体的に考えてみる。まず、4ステップの一つ目「道德的問題に関する人間関係の場면을精神的に構築する」とは、その問題状況において表面的な関係性を捉えるのではなく、その場面に潜む「葛藤」からその本質的な関係を捉え、「自分事」として「問題意識」をもたせることであると考える。

二つ目「問題状況や人間関係の場面の本質を認識する」とは、課題に対し客観的に状況を把握することと登場人物の気持ちなどへの共感的な想像力から多面的・多角的に道德的な「価値判断」をさせるようにすることであると考える。

三つ目「その認識に基づいて解決の行動方針を具体的に立案する」とは、これまでの知識や体験からでた考えをさらに他者と問題について「置換・比較・吟味」して考え、話し合う経験を加えて「行動立案」させることであると考える。

四つ目「問題解決の行動方針を検討して自己決定する」とは、これまでのステップで課題に対して自分事として問題意識を持ち、解決策を多面的・多角的な視点で総合的に価値判断することで、狭い自分勝手な考えから自分の成長や自分だけではなく周りの幸福なども含めた思考の広がりが出てきた後、自分には何ができるのか、または何をするのか行動方針を「自己決定」させることであると考える。

表 1：問題解決型道徳学習の 4 ステップと問題解決の具体的ステップ

	デューイによる問題解決の 4 ステップ	問題解決の具体的ステップ
1	道徳的問題に関する人間関係の場면을精神的に構築する。	■問題状況を捉えて葛藤を見だし、問題意識をもたせる。[問題意識・葛藤]
2	問題状況や人間関係の場面の本質を認識する。	■課題を提示し、共感的想像力と人間関係を見据えて判断させる。[課題提示・内省]
3	その認識に基づいて解決の行動方針を具体的に立案する。	■何をしたらよいか、どのように決めたらよいかを問う。どのような意味をもって行動を立案したのかを尋ねる。[行動立案・熟慮]
4	問題解決の行動方針を検討して自己決定する。	■自他の欲求や行為の結果を熟慮し、解決策を決めさせ各自の意思を明確にさせる。[自己決定]

そして、このデューイが提唱した問題解決の 4 ステップの流れをそれぞれのキーワードをもとに構想図として表したのが図 1 である。この図ではキーワードをもとに①問題意識（葛藤）②課題提示（内省）③行動立案（熟慮）④自己決定の順に四つのステップで表しているが、授業実践の中で①～④は別々のものではなく、①から③が相互に循環しながら成り立つものと考



図 1：問題解決型道徳学習の 4 ステップの構想図

えられたので構想図ではこのような循環型の形にしている。筆者はこのステップの中で、発問や問い返しをしながら議論の場を創造し、それを具体的な場面での自己決定につながるようにした。

3. 方法

- (1) 対象 A 中学校 1 年生 (25 名)
- (2) 期間 令和 3 年 5 月～12 月
- (3) 実践内容

デューイの提唱する問題解決型道徳授業の 4 ステップを具体的ステップに捉え直し、道徳科授業に取り入れて実践を行うこととした。なお、表 1 の 4 ステップに基づいて発問を構想していくが、ステップ 4 の最終的な自己決定は、実践的な場で具体的に考えてこそその意義を果たすものと考えられることから、ステップ 4 は、特別活動などの実践的な学習場面で行うこととする。道徳授業と特別活動などを組み合わせたユニットを全 7 セット行った。1・2 学期のユニット計画は、表 2 のとおりである。(道徳科 15 回、特別活動 5 回、常時活動 1 回、総合的な学習の時間 1 回)

そして、この 4 ステップを具体的に捉え直し、道徳授業と特別活動等とを関連付けて実践を行った。全 15 回の道徳授業のうち 13 回目の授業(教材名「ごみ箱をもっと増やして」内容項目【遵法精神、公德心】)で構想した具体的な発問は、表 3 のとおりである。

表 2：1・2 学期のユニット計画（全 7 セット）

1 学期のユニット計画（3 セット）	2 学期のユニット計画（4 セット）
1 ①山に来る資格がない1【節度, 節制】 ②山に来る資格がない2【節度, 節制】 ③生活日誌「目標を達成するために」 (常時活動)	1 ①全校一を目指して 【よりよい学校生活, 集団生活の充実】 ②係活動を充実させよう(特別活動)
2 ①いじめに当たるのはどれだろう 【公正, 公平, 社会正義】 ②やさしさいっぱいクラス宣言 (特別活動) ③ふたつの心 【相互理解, 寛容】【公正, 公平, 社会正義】	2 ①地域のよさを見つけよう(総合的な学習) ②郷土を彫る 【郷土の伝統と文化の尊重, 郷土を愛する態度】 ③地域のよさを見つけよう(総合的な学習)
3 ①自分の性格が大嫌い! 【向上心, 個性の伸長】 ②ジョハリの窓でせーのドン (特別活動) 本が泣いています 【社会参画, 公共の精神】	3 ①その人が本当に望んでいること 【思いやり, 感謝】 ②思いやりの日々【思いやり, 感謝】 ③聴くスキル(特別活動)
	4 ①新しいプライド【勤労】 ②父のひとこと【よりよく生きる喜び】 ③ごみ箱をもっと増やして【遵法精神, 公德心】 ④「どうせ無理」という言葉に負けない1 ⑤「どうせ無理」という言葉に負けない2 【真理の探究, 創造】 ⑥夢を実現させるために(特別活動)

表 3：道徳授業実践（教材名：ごみ箱をもっと増やして）

	問題解決の具体的なステップ	授業における発問
1	■問題状況を捉えて葛藤を見だし、問題意識をもたせる。[問題意識・葛藤]	・「もしも外にごみ箱がなかったらどうしますか。」
2	■課題を提示し、共感的想像力と人間関係を見据えて判断させる。[課題提示・内省]	・「誰もが気持ちよく生活できる社会ってどうすればいいの。」
3	■何をしたらよいか、どのように決めたらよいかを問う。どのような意味をもって行動を立案したのかを尋ねる。[行動立案・熟慮]	・「誰もが気持ちよく生活できるためには、日本のごみ箱を増やすことについて賛成ですか。反対ですか。」
4	■自他の欲求や行為の結果を熟慮し、解決策を決めさせ各自の意思を明確にさせる。[自己決定]	・「あなたは夢を叶えるために何をしますか。」 (特別活動)

ステップ 1 では、葛藤を見だし問題意識を持たせることが重要であることから、総合的な学習の時間で調べていた地域の環境やごみ箱の話題に触れながら「もしも外にごみ箱がなかったらどうしますか」と発問した。

ステップ 2 では、課題を提示し、共感的想像力と人間関係を見据えて判断させる中で内省を促す。ここでは、自分たちの地域についても関連させて「誰もが気持ちよく生活できる社会ってどうすればいいの」と課題を設定した。思考を深めるために、例えば、罰が必要という意見に対して「罰があればやめるのか」と問い返した。

ステップ 3 では、行動立案とともに熟慮させる。単純で表面的に出した「ごみ箱を増やすこと」や「減らすこと」を解決策とすることが行動立案ではなく、その内側にある自律的な捉え方や人の心情を想像するなど熟慮させる。そのため、ごみ箱を増やすことに「賛成」と「反対」の立場に分かれて話し合いを行った。そのうえで、「誰もが気持ちよく生活できるためには、日本のごみ箱を増やすことについて賛成ですか。反対ですか。」と問い、チャートを使い根拠を複数出すようにして話し合わせることで、根拠を明確にして各自の考えを言語化させた。

ステップ 4 は、ここでは、複数の内容項目を扱った後、道徳授業での葛藤、内省、熟慮を基に実践的な活動の場面で、解決策を決めさせ各自の意思を明確にさせることとした。そのため、特別活

様式 4

動において「あなたは夢を叶えるために何をしますか」と問いかけ目標達成シートを使って自己決定させるようにした。

以上のように、道徳科と特別活動とを関連付けてユニット学習を組み立てて授業を行った。また筆者はこのステップの中で、発問や問い返しをしながら議論の場を創造することとした。そのため指導案作成に当たり、生徒の思考を綿密に想定し思考を深めるための問い返しも準備した。

(4) 検証方法

①自己決定志向性尺度調査

自己決定の意識を測定するため、新井・佐藤（2000）による「自己決定意識尺度」の因子分析結果のうち「自己決定志向性」（8項目）の因子に関して本研究の介入前（5月）・介入後（12月）に調査（5件法）を行って自己決定力に関する検証を行う（表4）。

表4：自己決定志向性尺度項目

①わたしは、自分のことは自分で決めたいと思います。
②わたしは、自分で決めるときの方がやる気ができます。
③わたしは、自分のことはささいなことでも自分で決めたいと思います。
④わたしの将来は、自分の考えや意志によって決まると思います。
⑤わたしは、まわりから反対されても自分がとてもやりたいことは、たぶんどけると思います。
⑥わたしは、大事なことは自分で決めていると思います。
⑦わたしは、大事なことは自分で決めたいと思います。
⑧わたしは、大事なことをきちんと決める能力を持っています。

②毎回の道徳授業アンケート

「考え議論する」道徳の実現に必要な要素として、「思考意欲」「話し合いや議論」「行動立案」「自己内省」「生活に生かす意欲」に関する5項目を設定し、毎回の道徳授業後に振り返りアンケート（5件法）を行って道徳授業に対する生徒の反応を捉える（表5）。

表5：授業アンケート項目

項目1	【思考意欲】課題や問題について考えようとする意欲がわいた
項目2	【話し合いや議論】課題や問題についてみんなと話し合いや議論ができた
項目3	【行動立案】課題や問題についてどうすればいいの自分なりに決めることができた
項目4	【自己内省】自分の行動や考え方を見直すことがあった
項目5	【実践意欲】授業で学んだことを自分の生活に生かそうと思った

③生徒の意見・感想

①②の検証を補完するものとして、生徒の発言やノート等への記述から生徒の変容を捉える。

4. 結果

(1) 自己決定志向性尺度調査

回答結果を得点化（5～1点）して対応のある t 検定により事前・事後の平均値の差を検定した。その結果、 $t(22) = 3.39$ 、 $p = .003$ で、事前比べて事後の方が有意に高くなっていた（表6）。

表6：自己決定志向性への影響（ $N = 23$ ）

	事前	事後	p
M	31.74	34.22	**
SD	5.06	4.73	

(2) 毎回の道徳授業アンケート

** $p < .01$

回答結果を得点化（5～1点）すると、各回の平均得点が8割（4.0）の得点を超えており、全15

様式 4

回の平均は 4.40 となった。また、15 回のうち 13 回目の授業（教材名「ごみ箱をもっと増やして」）の平均が 4.65 と最も高かった（表 7）。

表 7：道徳授業アンケート結果 5 項目 N=25 (5 点満点)

	教材名	項目 1	項目 2	項目 3	項目 4	項目 5	平均	
1 学期	1 回目	山に来る資格がない 1	4.36	4.36	4.28	4.04	4.24	4.26
	2 回目	山に来る資格がない 2	4.20	4.08	4.32	4.20	4.32	4.22
	3 回目	いじめに当たるのはどれだろう	4.36	4.32	4.48	4.20	4.56	4.38
	4 回目	ふたつの心	4.60	4.40	4.60	4.44	4.60	4.53
	5 回目	自分の性格が大嫌い	4.44	4.04	4.44	4.56	4.28	4.35
2 学期	6 回目	本が泣いています	4.28	4.40	4.44	4.16	4.40	4.34
	7 回目	全校一を目指して	4.35	3.95	4.25	3.75	4.30	4.12
	8 回目	新しいプライド	4.36	4.28	4.28	4.08	4.28	4.26
	9 回目	父のひとこと	4.38	4.33	4.46	4.38	4.46	4.40
	10 回目	郷土を彫る	4.50	4.33	4.54	4.25	4.42	4.41
	11 回目	その人が本当に望んでいること	4.56	4.42	4.52	4.20	4.60	4.46
	12 回目	思いやりの日々	4.59	4.39	4.39	4.26	4.43	4.42
	13 回目	ごみ箱をもっと増やして	4.71	4.75	4.63	4.58	4.58	4.65
	14 回目	「どうせ無理」という言葉に負けない 1	4.58	4.50	4.67	4.58	4.58	4.58
	15 回目	「どうせ無理」という言葉に負けない 2	4.67	4.54	4.67	4.67	4.54	4.62
	平均	4.45	4.34	4.47	4.29	4.44	4.40	

(3) 生徒の意見・感想

実践を経ての感想として、例えば、「自分のことを好きにならなくていい」という考えから特別活動とのユニット後には「自分の性格が嫌いで教科書を読んでもすぐには自分のことを好きになれなかったけど、これから好きになれたらいいなと思った」という記述に見られるようにユニット前後で変容が見られた生徒もいた。感想を書かない生徒が最後の授業では、「これからはもう少し頑張ろうと思いました」という記述に見られるように実践意欲が芽生えたと受け取れる生徒もいた。

また、「あきらめそうになったとき成功するのに何が必要なのかと考えられるようになった」「本当の思いやりとは何かを考えて行動した」「『本が泣いています』で学習したので学校で借りた本やみんなが使う公共のものは大切に扱うようにしている」などの意見が出され実効性ある道徳性を養っている様子が見られた。

5. 考察

(1) 自己決定志向性尺度調査

尺度調査の結果から、デューイが提唱した問題解決の 4 ステップを導入したユニット授業の有効性が見いだされた。デューイによる問題解決の 4 ステップを取り入れることで「葛藤」「内省」「熟慮」が促されると考えられ、道徳的価値を見つめ直した後に「自己決定」を行うことで、生徒が主体的に未来のなりたい自分に向けてよりよい選択をしようとする意識が促されたものと思われる。

(2) 毎回の道徳授業アンケート

全 15 回の授業は、各回の平均得点が 8 割 (4.0) の得点を超えており、「考え議論する」道徳として本研究で捉えている 5 項目の要素をおおむね満たしているものと捉えられた。全授業のうち平均が最も高かった 13 回目の授業は、環境課題を扱っている総合学習と関連しており、「ごみ箱を増やすこと」に「賛成」か「反対」かを考える授業構成が自分たちの地域の課題と重なり、自分事となったことで思考意欲が増したと考えられる。さらに「賛成」と「反対」でグループに分かれて話し合ってから全体で議論したことで自身の考えの根拠が明確になり議論の活性化が促されたと推察する。反対に、数値が低かった授業は自分事として思考し表現する意欲が少なかったことが要因

だと考えられる。また、学期の始めは数値が低い傾向が見られたため授業のスタイルに慣れること、意見が言いやすい人間関係や学級の雰囲気も重要であると推察する。

(3) 全体考察

デューイの問題解決の4ステップに基づいて「葛藤」「内省」「熟慮」のうえで特別活動などの場で「自己決定」を図る機会を確保した結果、自己決定力が養われたと考える。道徳授業において発問の工夫により問題意識を持って自分事として考え、問い返しの発問で弱い自分を乗り越えることに気づき、議論の場で表現し他者の考えを聞いて自身の考えの根拠を明らかにすることで、よりよい選択をしようとする意欲が上昇する。そして、特別活動などで実際に選択する体験を重ねることで自己決定力を養うのだと考える。

6. まとめ

(1) 「考え議論する」道徳の実現

「考え議論する」道徳の実現に必要な要素は、自分が問題を意識し解決しようとする「思考意欲」、他者との「話し合いや議論」、そして考え議論する中で「自己内省」し、「行動立案」のうえで「実践意欲」をもつことであると本研究では考えた。

その観点で、デューイによる問題解決の4ステップをもとに構想、実践した道徳科授業は、デューイの4ステップを取り入れることで、「葛藤」「内省」「熟慮」が促され、「考え議論する」道徳に迫ることができると考えられた。

特に、この4ステップの中で「葛藤」「内省」「熟慮」をより促進させるためには、生徒が自分事として葛藤し問題解決をしやすい教材の活用、生徒の思考の流れに即した発問や問い返し、役割演技による具体的な行動化のイメージ、特別活動など実践と関連づけて思考を重ねられるユニット構想などの取組や活動が有効であることが示唆された。

(2) 「自己決定力」に対する問題解決型道徳授業ユニットの有効性

デューイが提唱した問題解決の4ステップを導入したユニット授業の有効性が見いだされた。

「考え議論」し、自己決定力を育成する道徳授業としては、ステップ1において問題状況における表面的な関係性を捉えるのではなく、その場面に潜む「葛藤」からその本質的な関係を捉え、「自分事」として「問題意識」をもたせることであると考える。

ステップ2において日常生活に即したより身近で自分事として考えたいような課題を設定するとともに問い返してそれを深く考えさせることが重要となる。例えば、ごみを減らすためには、罰が必要という意見に対して「罰があればやめるのか」と問い返すと罰ではなく自身の考えの問題だということに気づく意見が出される。

そのうえで、ステップ3では、「自分だったらどうするのか」と自身の立場から根拠とともに意思表示をさせる。ここでは、賛成・反対などそれぞれの立場の根拠を聞き合うことが重要であり、その中で行動が立案される。問い返して深めた確かな考えと根拠があってこそ自己の行動方針を決めることができる。

ステップ4では、特別活動などの実践の場面と関連付けたユニット構成により自己決定させる。内容項目の類似性や発展性を考えて道徳の教材を組み合わせることや、学校行事などの活動との連動を考えるなどしてユニットを構成する。

こうした単元構想による道徳学習はこれまでも行われてきたが「自己決定力」に対する有効性を明らかにしたことは本研究の意義である。ステップ4では、自己決定の場面を設けるが、ここでは単に、何をすべきかの自己決定に留まるのではなく、道徳科との連動の基、道徳的価値に照らして自分の状況を判断し、自分の弱さを乗り越え、未来のなりたい自分のために何が必要か考えさせる

様式 4

ようにする。生徒の考えの根拠を問いながら、自己決定の根底にある道徳的価値に気づかせ、評価・承認をしながら生徒が自らの決定に意義や自信をもてるようにすることが重要となる。

以上のことにより、自己決定力を育成する道徳授業においては、自分事となる課題や発問、問い返しの発問、学級の雰囲気や意見が言える関係性が大切であると考えられた。そうしたことを取り入れる中で、特に、行動方針の立案のためには、考えの根拠を明確にさせることが重要であると考えられた。また、根拠が明確になることで、議論が活性化され、それぞれの立場の根拠を聞き合う中で道徳的価値の気づきも生じると思われた。

最後に、こうした研究の成果を表 8 にまとめて、自己決定力を養う「考え議論する」道徳授業の一つの例として以下のとおり「問題解決型道徳授業ユニットモデル」を提案する。

表 8： 問題解決型道徳授業ユニットモデル

	デューイによる 問題解決のステップ	問題解決の 具体的ステップ	発問例	授業の具体的な活動の例	ユニットについて
ステップ 1	問題道徳的に関する人間関係の場面を精神的に構築する。	■問題状況を捉えて葛藤を見だし、問題意識をもたせる。 【問題意識・葛藤】	・もしも外にごみ箱がなかったらどうしますか。	〈導入〉 ・葛藤を起こさせ自分事となるような発問により問題意識を持たせる。 (方法) ・他教科との連携、 アンケート結果、 初発の感想などによって自分事に	■ 4 ステップに基づき「葛藤」「内省」「熟慮」のある道徳授業と、特別活動など実践の場面で「自己決定」を図る機会を確保したユニット構成 ・道徳授業の中で自分事として内省し、根拠を思考しながら熟慮のうえ行動立案をして実践意欲を高める活動と、特別活動等との関連を図って自身の生き方を振り返りながら根拠をもって自己決定できる活動とを組み合わせる。 ・生徒の視点に立って授業やユニットの流れを構成することが肝要。それによって、活動が一貫性を持って繰り返され、生徒の自己決定につながる。
ステップ 2	問題状況や人間関係の場面の本質を認識する。	■課題を提示し、共感的想像力と人間関係を見据えて判断させる。 【課題提示・内省】	・誰もが気持ちよく生活できる社会のためにどうすればいいのか。	〈展開〉 ・自分事として考えられて行動化のイメージが持てるような課題を設定する。 ・価値を揺さぶる問い返しを入れて道徳的価値に関わって考えを深めさせる。 (課題) 「どうしたら～できるだろう」「～するために必要なことは何だろう」など(問い返しの観点例) ・現実を見つめる (本当にそうなのか) ・人間を見つめる (できないと思う気持ちや大変だと思う気持ちはないのか) ・違いを見つめる (なぜ違うのか)	
ステップ 3	その認識に基づいて解決の行動方針を具体的に立案する。	■何をしたらよいか、どのように決めたらよいかを問う。どのような意味をもって行動を立案したのかを尋ねる。 【行動立案・熟慮】	・誰もが気持ちよく生活できるためには日本のごみ箱を増やすことについて賛成ですか、反対ですか。	・自身の立場から根拠とともに意思表示させ、それぞれの立場の根拠を聞き合うようにさせる。(考えを述べ、聞き合える学級の雰囲気が重要) (方法) ・二択一より立場表明 ・選択肢提示により立場表明 ・役割演技での行動選択 ・ランキングやチャートなど思考ツールの活用 (発問) ・どちら(どれ)を選びますか ・どうしてそれを選んだのですか ・何を大切にしていますか ・どうしたら解決できますか	
ステップ 4	問題解決の行動方針を検討して自己決定する。	■自他の欲求や行為の結果を熟慮し、解決策を決めさせ各自の意思を明確にさせる。 【自己決定】	・あなたは夢を叶えるために何をしますか。	〈特別活動など〉 ・項目の類似性や発展性を考えて組み合わせ、自己決定の場面を設ける。 ・自己決定の根拠を尋ね、道徳的価値に照らして自分の状況を考えさせる。 ・評価や承認をして、自己決定に意義や自信を与える。 (方法) ・ワークシートや発表で個別に表明 ・掲示物やICT活用により意見の共有、互いに評価・承認 (発問) ・そう決めた理由は何ですか ・どんな場面で生かそうと思いますか	

《註》

- 1 J. デューイ [著] 河村望訳 『倫理学 10』人間の科学社、2002 年、203 頁
- 2 前掲書 1) 202 頁
- 3 前掲書 1) 203 頁
- 4 柳沼良太『「生きる力」を育む道徳教育』慶應義塾大学出版会、2012 年

参考文献

- ・新井邦二郎・佐藤純 (2000) . 「児童・生徒の自己決定意識尺度の作成」 筑波大学心理学研究 22. 151-160
- ・押谷由夫監修 香川県小学校道徳教育研究会著 (1991) . 『子供が自ら学ぶ道徳教育一体験を生かした道徳授業の展開一』東洋館出版社
- ・J. デューイ [著] 河村望訳 (2002) . 『倫理学 10』人間の科学社
- ・文部科学省 (2013) . 道徳教育の充実に関する懇談会、「今後の道徳教育の改善・充実方策について (報告) ～新しい時代を、人としてよりよく生きる力を育てるために～」
- ・柳沼良太 (2012) . 『「生きる力」を育む道徳教育』慶應義塾大学出版会